次期学習指導要領 教科別まとめ　　中学校 No.07

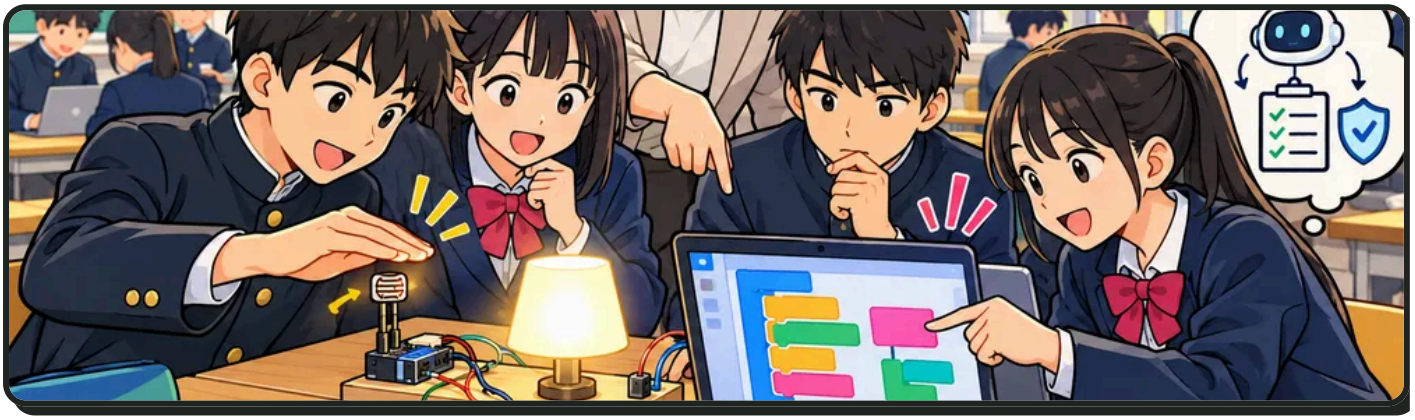
審議まとめ（2026年10月5日）を**中学校の先生向け**にまとめ直しました

中学校版

情報・技術科（仮称）

次期学習指導要領で、どう変わる？

小は総合に「情報の領域」、中は新教科、高は情報科を充実



10秒でいうと　技術分野を新教科「情報・技術科（仮称）」に。1・2年は最大70、3年は最大35コマ程度

やさしく言うと

中学校では、技術・家庭科の技術分野を、新しい教科「情報・技術科」（仮称）とする案です。「情報技術」と「情報を基盤とした生産技術」の2つの領域で構成する方向です。必要な時数は、1・2年が各学年最大70コマ程度、3年が最大35コマ程度の見込みです。中学校では令和11年度から段階的に先行実施する方向です。

中学校はいつから？

全面実施	2031年度（令和13年度）から（見込み）
移行期間	2028～2030年度
告示	2026年度末の予定
教科書	2031年度から新しい教科書（2029年度に検定）

この冊子の中身

1 情報・技術科（仮称）のポイント	4つ	2 主な変更点	8項目
3 現行と次期の比較（新旧対照）	5項目	4 授業時数	
5 生成AI・ICTとの付き合い方	8項目	6 今からできる準備チェックリスト	6項目
7 次期を先取りする授業アイデア	1本	8 指導案（試案）	1本

無料 原田英語.com 次期学習指導要領ナビ

研修・会議・授業・保護者会での印刷・コピー・配布・投影はご自由にどうぞ。ご連絡は不要です。クレジットは残してください。
審議まとめ（2026年10月5日）準拠・出典ページつき。告示前の方向性で、今後変わることがあります。2026年11月4日 版

サイトで見る

情報・技術、情報の3行要約（全校種）

1. 中学校の技術・家庭科は「情報・技術科」と「家庭科」に分け、情報・技術科は「情報技術」と「情報を基盤とした生産技術」の2領域とする案が示された。
2. 小学校の総合的な探究の時間に「情報の領域」を加え、3〜6年で情報技術の使い方・安全な扱い方・仕組みを順序立てて学ぶ方向。
3. 新しい教科・領域の時数は、総時数を増やさず他教科から広く薄く確保する方向で、現時点の試算では一律3〜4%程度の減少が見込まれる（具体の時数は今後検討）。高校は情報Ⅰ・Ⅱを維持し、AI・データと探究（PBL）を強化する案。

※「情報・技術科」は資料編では仮称で、2領域で構成する案。小・中のコマ数は学習活動を積み上げた「各学年最大」の見込みで、標準授業時数の実数は今後示される。新教科・領域は小学校が令和10年度、中学校が令和11年度から段階的に先行実施。

1 情報・技術科（仮称）のポイント

4つ

1 2つの領域と7つの内容項目

情報技術の領域は「情報の表現とデジタル化」「プログラミングと自動化」「情報基盤とシステム化」の3項目の案です。生産技術の領域は4項目の案です。「材料加工とデジタル製作」「生物育成とデータ活用」「エネルギー変換とスマート化」「技術の統合」です（いずれも仮称）。 P241 P252

授業では、たとえば 作物の栽培で土の水分をセンサーで測り、そのデータを見て水やりの時期を判断する、といった授業が考えられます。

2 新しく「技術の統合」を学ぶ

新しく「技術の統合」（仮称）を設け、複数の技術を組み合わせて課題を解決する学習を行う方向です。自動運転や介護ロボットのように、技術が組み合わさって働く仕組みを理解するねらいです。まとまった時間を確保できるよう、柔軟な指導計画を可能にすることが考えられています。 P252 P254

授業では、たとえば 以前作った木製の作品にセンサーと照明を付け、防災に役立つ機能を持たせる、といった題材が考えられます。

3 仕組みを知り、使って解決し、ふり返る

今の技術科では、多くの生徒が体験だけで終わり、深い理解に至っていないことが課題とされました。そこで、技術の原理や仕組みを知る、問題解決を実践する、技術を俯瞰・評価する、という流れを重視する方向です。学習の順序は、引き続き教師の裁量に委ねる考え方です。 P241 P254 P259

授業では、たとえば 通信の仕組みを学んだあと、情報を伝えるアプリを作り、最後に便利さとリスクを話し合う、といった単元が考えられます。

4 過程を見る評価と、先生への支援

評価では、課題解決の過程や取組の様子を重視する方向です。端末で問題解決の過程を記録・共有したり、ルーブリック（到達の目安の表）を使ったりすることが示されています。国は研修や、オンラインの免許法認定講習の充実、遠隔授業などの実証を進めるとしています。P261 P262

授業では、たとえば 製作の途中経過を毎時間、写真とメモで端末に残し、ルーブリックを見ながら自分で改善点を書く、といった進め方が考えられます。

2 主な変更点

8項目

1. 中 中学校の技術・家庭科が分かれ、新教科「情報・技術科」とする案

今の技術・家庭科は、技術分野と家庭分野で免許も担当も別なのに、成績（評定）は1つの教科として付けている。そのデメリットが大きいため、家庭科を独立した教科にし、技術分野は時数を確保したうえで「情報・技術科」とすることが適当とされた。名前は「情報技術科」ではなく「情報・技術科」で、情報技術だけでなく、ものづくりなどの生産技術もいっしょに学ぶ教科だと周知していくとされている。P74 P241

2. 新教科・領域の時数は、他の教科から「広く薄く」減らして生み出す方向

年間の総授業時数は増やさない前提のため、新教科・領域の時数を特定の教科から削るのではなく、小学校3年以上で今35コマを超える教科等から、同じ割合で時数を減らして確保する方向が示された。減らす幅は、現時点の試算で一律3～4%程度と見込まれている。35コマ以下の教科等は「週1コマ程度は必要」として減らさない。具体的な数字は今後、教育課程企画特別部会で検討して示される。P78 P79

3. 中 情報・技術科は2領域・7つの内容項目で組み立て直す案

「情報技術」領域は「情報の表現とデジタル化」「プログラミングと自動化」「情報基盤とシステム化」の3項目（いずれも仮称）。「情報を基盤とした生産技術」領域は、今の材料と加工・生物育成・エネルギー変換を受けつぐ3項目に、それらを組み合わせて課題を解決する新項目「技術の統合」を加えた4項目とする案。生産技術でも3Dプリンター、センサーのデータ、シミュレータなど情報技術とのつながりを強める。「技術の統合」には、まとまった時間を取れるよう柔軟な指導計画を認める。P241 P252 P254

4. タイピングや端末操作など、各教科で教えていた内容を新教科・領域へ移す方向

これまで各教科でばらばらに教えていたタイピング、映像の操作、グラフの作り方、データ分析の方法などは、新教科・領域で順序立てて学ぶ。プログラミングやデータ活用、産業と情報の関わり、情報機器と健康の関わりなども新教科・領域へ移す方向で、各教科はその分の内容を減らし、教科ならではの学びに時間を使えるようにする。メディアリテラシーはこれまで国語科や社会科でも扱ってきたが、新教科・領域で大きく強化する方向。どの内容を移すかは、教育課程全体を見ながら今後整理する。P243 P257

5. 小 中 全面実施の前から段階的に先行実施する方向

全面実施は小学校が令和12年度、中学校が令和13年度と想定されているが、社会の変化に遅れないよう、新教科・領域を先行実施する経過措置を、小学校は令和10年度から、中学校は令和11年度から段階的に講ずることが適当とされた。具体的な中身は今後検討される。調整授業時数制度は小・中学校とも令和10年度から先行実施される予定で、それを使って早めに取り組むこともできる。P79 P262

6. 教員不足への対策：研修・免許講習・遠隔授業など

令和7年度時点で、中学校の技術分野の担当教員のうち臨時免許状の人が543名、免許外で教えている人が1,863名、高校情報科でもそれぞれ47名・97名いて、「危機的な課題」とされている。国は、新課程の研修コンテンツを小学校向けは令和9年度末、中学校向けは令和10年度末までに作り、小・中・高のすべての担当教員に研修を行う。オンラインの免許法認定講習の充実、複数校をまとめて教える・遠隔授業の実証、企業などからの外部講師の活用、免許制度の検討も進める。P239 P261 P262

7. 国が授業でそのまま使える動画・教材を作り、年1回以上更新する

先生が過度な負担なく授業できるよう、国が授業動画を含む学習者用教材を作っており、技術の進歩で古くならないよう少なくとも年に1回程度アップデートする。公表時期は前もって学校に伝える。「技術の統合」については、教材だけでなく指導計画の例・参考資料・研修をセットで提供する。3Dプリンターなどの整備状況の見える化や、PC教室の維持・更新に向けた財政措置の整理も進める。 P240 P251 P254 P262

8. メディアリテラシー・AI・プログラミング的思考を小中高でつなげて育てる

うその情報や偏った情報を見きわめる「メディアリテラシー」、AIを使いこなす力、「プログラミング的思考」を、情報活用能力の中心として小・中・高で系統的に育てる。プログラミング的思考は、AIに指示してプログラムを作らせる場合も含め、出てきたものを論理的・批判的に確かめて直し、責任を持って使うところまでを含む考え方に広げ、中学・高校でも育てる。AIの使い方のポイントは改訂を待たずガイドラインで示し、生成AIのガイドラインは令和8年度中に改定する。 P248 P249 P262

3 現行と次期の比較（新旧対照）

5項目

黄色のマーカー＝次期で新しく入る・強く打ち出される言葉　~~取り消し線~~＝現行から消える・言い方が変わる言葉

項目	現行	次期（審議まとめの方向）
中学校での位置付け	技術・家庭科の「技術分野」。A材料と加工、B生物育成、Cエネルギー変換、D情報の技術の4領域で、評定は家庭分野と合わせて1教科。	家庭科と分けて独立させた**新教科「情報・技術科」**とする案。「情報技術」領域と「情報を基盤とした生産技術」領域の**2領域**。 P72 P74 P241
中学校での情報技術の学習	デジタル技術の学習が「D情報の技術」に閉じ、コンピュータやネットワークの仕組み、データ活用が十分に扱われていない。他の3領域ではデジタル技術との関連が図られていない。	「情報技術」領域を独立させ、デジタル化・自動化・システム化を段階的に学ぶ。生産技術でも**3Dプリンター**やセンサーのデータなどを活用し、両方を組み合わせる**「技術の統合」**を新設する案。 P239 P241 P252
情報活用能力のとらえ方	「情報及び情報技術を活用する力」として、学習の基盤となる資質・能力に位置付け。	情報活用能力は**「情報技術の活用」**に絞って整理し、「情報の活用」は各教科で育てる。「活用」「適切な取扱い」「特性の理解」の3要素で小中高を通して整理。 P238 P239
プログラミング的思考	前回改訂で小・中・高を通じたプログラミング教育を充実したが、内容や指導にばらつきがあり、問題解決にプログラミングを使う学習も十分でない。	**AIへの指示**も含め、作ったものを論理的・批判的に**評価・改善**し、責任を持って使うまでを含む考え方に捉え直し、小学校だけでなく中学・高校でも育てる。 P249
中学校での学習の順序	技術分野は第1学年の導入で各領域に触れることのほかは、学習の順序や学年の割り振りを定めていない。	学習順序は引き続き先生の裁量にまかせる。**調整授業時数制度**の対象にもなる（35コマ以下になれば第3学年のみ対象外）。 P259

4 授業時数

必要な時数の目安（学習活動の積み上げによる最大値）：小学校総合「情報の領域」は3・4年が各学年最大30コマ程度、5・6年が各学年最大35コマ程度。中学校「情報・技術科」は1・2年が各学年最大70コマ程度、3年が最大35コマ程度（現行の技術分野の内容を含む時数）。総合の「探究の領域」と「情報の領域」は別々に標準時数を設定。標準総授業時数は現行維持とし、小3以上で現在35コマを超える教科等から一律3～4%程度を減じて確保する考え方（3～4%は現時点の試算）。具体の時数は今後精査・検討（P78, P79, P257）。高校は情報Ⅰ・情報Ⅱともに4新単位（現行2単位。1新単位=17コマ）。必履修教科の合計が3新単位以下となる減単は不可（P80, P82, P259）。

8項目

5 生成AI・ICTとの付き合い方

1. AIの可能性とリスクの両方を学ぶ

AIなどの情報技術は社会のあらゆる活動の基盤になる一方、偽・誤情報の拡散、フィルターバブル、AIが人の認知や判断に与える影響などのリスクもあります。かたより・依存・学習過程の省略（認知的オフロード）などの負の側面を理解し、情報を批判的にとらえて使うメディアリテラシーが不可欠とされています。P235 P236

2. 今の課題：生成AIなど先端技術の内容が明確でない

現行の学習指導要領では、生成AIなどの先端技術に関わる内容がはっきり位置付けられておらず、情報モラルやメディアリテラシーも学校による差が大きいことが課題とされています。P72 P239

3. 中核となる学習内容：メディアリテラシー・AIを使いこなす力・プログラミング的思考

情報の真偽やかたよりを見極めるメディアリテラシー、AIを使いこなす力、プログラミング的思考を、情報活用能力の中核として小・中・高で体系的に整理します。AIの学習は内容項目を横断し、発達段階に応じて扱うとされています。P248 P249

4. AIを使いこなす力の中身

「AIエージェント」や「フィジカルAI」などAIの進展が速く、子供は検索エンジンなどを通じてすでにAIに日常的に触れています。AIを使いこなす力を、単なる操作ではなく、AIを適切かつ効果的に使って問題を解決したり考えをつくったりする力と捉えます。P248

5. 中学校「情報・技術科」：AIと生産技術

AIやセンシングの発展で情報技術と生産技術を組み合わせた技術が社会に広がっていることから、新しい内容項目「技術の統合」を設ける方向です。データの構造やネットワーク、AI、メディアの特性など基本的な仕組みも学ぶとされています。資料編では、AIを補助として使いながら設計・製作・評価改善する活動例が示されています。P252 P253 資料編(2)P154 資料編(2)P172 資料編(2)P174

6. 資料編：校種別の「AI自体を学ぶ」内容の例

小学校では「AIの出力には誤りやかたよりがある」「AIに頼りすぎない」「最後は人間が判断する」など、中学校では「AIの出力には誤りやかたよりがあり人の判断を尊重する」「権利侵害や悪用のリスク」など、高校ではAIの分析結果がデータやモデルの選び方で変わることなどが例として整理されています。資料編(2)P153

7. 資料編：「AIを活用して学ぶ」考え方

小学校はミニ探究ユニットの中で体験的に使い、中学校はAIを補助的な役割として問題発見や設計・評価改善で使い、高校ではAIの出力を一つの情報として妥当性やかたよりを検討しながら使う、と段階的に整理されています。資質・能力の育成に効果的かどうかを吟味して使うことが前提です。資料編(2)P154

8. 授業での活用例

情報科の活用例として、生成AIとの対話でヒントを得て解決策を考えてプログラムにしたり、作ったプログラムをクラウドで共有して統合・テストしたりして、試行錯誤の回数を増やすことが挙がっています。P260

6 今からできる準備チェックリスト

6項目

- [ ] 今すぐ 各教科で教えているタイピング、写真・動画の操作、グラフの作り方、スライド作成、データ分析の方法などを学年別に棚卸しし、どの学年で何を教えているかを一覧にします。新教科・領域に移る可能性のある内容と、教科に残す内容を考える材料になります。P243 P257
- [ ] 今すぐ 生成AIの利活用に関するガイドラインは、学習指導要領の改訂を待たずに令和8年度中に改定される予定です。改定版が出たら内容を確認し、校内の生成AI利用ルールと授業での使い方を更新します。P248 P262
- [ ] 告示まで 中学校で免許外や臨時免許で技術分野を担当している先生は、オンラインで全国どこからでも受けられる免許法認定講習の情報を確認しておきます。P239 P262
- [ ] 先行実施まで 国が作る研修コンテンツ（小学校向けは令和9年度末、中学校向けは令和10年度末まで）や授業動画の公表時期を把握し、校内研修で事前に視聴する時間を確保します。新教科・領域は小学校が令和10年度、中学校が令和11年度から段階的に先行実施される予定です。P79 P261 P262
- [ ] 先行実施まで 中学校では、3Dプリンター、センサー、計測・制御用の機器、PC教室などの整備状況を点検し、設置者の整備計画と照らし合わせておきます。P254 P262

☐ 先行実施まで 中学校の「技術の統合」に向けて、すでに製作した作品にセンサーなどの情報技術を付け加えて機能を高める題材を試作し、まとまった時間を取れる指導計画の組み方も試します。P254

7 次期を先取りする授業アイデア

1本

中2　1単位時間（50分）

AIが書いたプログラム、テストして直して使う

「このまま校舎に付けていい？」AIが作った自動点灯プログラムを、読んで試して責任をもって直します。

手順・ワークシート

ねらい

生成AIが作った計測・制御のプログラムを読み取って動作を予想し、テストで確かめて不具合を見付けて修正するとともに、AIの生成物を責任を持って使うために確かめるべきことを考える。

流れ

- 5分　先生が「暗くなったら廊下のライトをつける」という課題と、生成AIへの指示文、AIが出したプログラムを示し、「このまま校舎に付けていい？」と問いかけます。
- 10分　ペアでプログラムを読み、処理の流れをフローチャートに書き起こします。条件分岐と繰り返しの部分に印を付け、明るいとき・暗いときにどう動くかを予想します。
- 12分　テスト表に「明るい」「暗い」「その間くらい」の3条件を書き、センサーを手でおおう、ライトを当てるなどして実際に動かします。予想と結果を記録し、合わないところに印を付けます。
- 13分　合わなかった原因をプログラムの中から特定し、条件や数値を修正して再テストします。早く終わったペアは、同じ不具合が出ないようにするにはAIへの指示文をどう書き直せばよいかも考えます。
- 10分　学級で、AIが作ったプログラムを責任を持って使うためのチェックリスト（例：処理の流れを自分で説明できるか、境目の条件を試したか、想定外の使われ方をしたらどうなるか）を共有ボードにまとめ、社会で使われている自動制御の例と結び付けて振り返ります。

評価

テスト表と修正したプログラムから、条件分岐などの仕組みを理解して動作を予想し、テストで不具合を見付けて改善できているかを見取ります（知識・技能／思考・判断・表現）。振り返りでは、AIの生成物を検証して使う理由を自分の言葉で説明できているかを見ます。端末で記録した修正の過程を、ルーブリックとあわせて形成的評価に使います。

8 指導案（試案）

1本

中学校第3学年　技術・家庭（技術分野）　全8時間（本時は第4時）

計測・制御のプログラミング ～育てている植物の「水やり忘れ」を知らせる装置をつくろう～

中教審の審議まとめ（2026年10月5日）では、中学校の技術・家庭科の技術分野を適切な時数を確保したうえで「情報・技術科」とし、家庭科を独立した教科とすることが適当とされた。新教科は「情報技術」と「情報を基盤とした生産技術」の2領域で構成する方向である。本案は、その内容項目「プログラミングと自動化」…

指導案の全文

本時のねらい

計測したデータをもとに閾値を決めて理由を説明するとともに、生成AIが作ったプログラム例をフローチャートと照らして確かめ、実際に動かして不具合を見つけて修正することができる。

本時の流れ

- 5分 **導入** 前時に計測した土壌水分センサの値（乾いた土・少し湿った土・十分に湿った土）を班の記録表で確かめ、本時のめあてを知る。
- 10分 **展開** 班で閾値を決める。「この値をこえたら（または下回ったら）知らせる」という条件と、その値にした理由を、計測データをもとに書く。
- 15分 **展開** 教師が事前に生成AIに「土が乾いたらLEDで知らせるプログラム」を作らせた例を示す。班で、前時のフローチャートと照らして動きを予想し、実機で試して、意図と違う動きを見つけて直す。
- 12分 **展開** 自分たちの閾値を反映したプログラムを作り、乾いた土と湿った土を入れたカップで動作を確かめる。うまくいかない場合は、センサの値を画面に表示させて原因を探す。
- 8分 **まとめ** 2班程度が、閾値の理由と修正した点を発表する。振り返りシートに「生成AIが作ったプログラムを使うときに確かめるべきこと」と、次時に工夫したいことを書く。

PDF版：shidoan-chu3-gijutsu-keisoku-seigyo.pdf（ダウンロードコーナー）

ご利用について

サイトで最新版を見る

- **研修・会議・授業・保護者会での印刷・コピー・配布・投影はご自由にどうぞ。ご連絡は不要です。**（校内研修・教育委員会の研修・教員養成の授業・学年会・PTAなど）
- クレジット「原田英語.com 次期学習指導要領ナビ」（https://www.haradaeigo.com/jikigakushushido/）はそのまま残してください。各ページの下に入っています。
- 中身は中央教育審議会 教育課程部会「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」（2026年10月5日）ほか文部科学省の資料をもとに、原田英語.comが要約したものです。**告示前の方向性**で、答申・告示で変わることがあります。（仮称）の名前も今後変わる可能性があります。
- 文中の P〇 は審議まとめ本体（PDF）のページ、**資料編（1）～（3）P〇** は第3部 資料編（PDF）のページです（PDFのページ番号。印刷されたページ番号とは1つずれることがあります）。PDFで見ているときはクリックで原文が開きます。
- 授業アイデア・指導案は、審議まとめの方向性をふまえた原田英語.comのオリジナルの試案です。
- 最新の情報・ほかのPDFはサイトで：https://www.haradaeigo.com/jikigakushushido/download/（2026年11月4日 版）